

「未知」への旅

経営学部
山田 晶子

【 】

最初に連想ゲームをしてみよう。出発は「大学生」という言葉である。まず1つの型として(A)大学生=青春=若さ=冒険=感動というものが存在する。次にこれに対する裏の(?)型として(B)大学生=迷い=悩み=孤独=ひきこもりというものがある。そして3つ目の型として、(C)両者の中間というものが存在する。

さて、あなたはどの型に入るのだろうか。多くの学生は中間の(C)型に入るのではないだろうか。「青春は楽しい」という世間の俗説に反して、筆者は、今、自分の青春時代を振り返りまた友だちの話聞き、青春に関する多くの本を読んできて、「青春は楽しい時もあるけれども悩みと精神的苦痛の時期である」ということが真実を衝いている言葉であると思う。そして筆者の年代の者は、ほとんど皆が、それぞれに悩みを解決するべく一生懸命努力してきたと思うのである。

悩みは多種多様である。またその解決策はいろいろとあると思うが、一番大きな悩みは「自分とは何か?」という哲学的命題であり、これは一生つきまとう悩みであろう。

今、若さに恵まれているが、(A)と(B)の中間的な存在である大多数の学生に、筆者は、それが大きなものであれ小さなものであれ、悩みを解決する方策として、また青春時代をより充実したものにするために、「未知」への旅が有効であるこ

とを述べようと思う。

【 】

Birds of a feather flock together. (類は友を呼ぶ。)これは有名なことわざであり、誰もがこのことわざは真実を告げていると思うであろう。筆者も、ある程度、このことわざが真実であることを認める。しかし、「本当の自分」を知るのは難しいことである。特に若い人はまだまだこれからその「人間」が形成されていくのであり、「本当の自分」については分かっていないと思う。ゆえにあまり早くから、「自分はこの友人としかつき合わない」「あの人は別世界の人だ」と決めつけることは、自分の成長を自分で制限してしまうことになるであろう。若いときにはできるだけ多くの人と接して欲しいと思う。そして知らない人が自分に近づいてきたら、必要以上に警戒したり逃げ腰にならないで欲しい。積極的に知らない世界、知らない分野の人と知り合いになろう。「類は友を呼ぶ」ということわざの真実は、人が老いてからこそ当てはまることわざであると言えよう。

勉強やクラブ活動で忙しいから付き合える人も時間も限られてくるとは思う。しかし、本の世界には大勢の未知の人間が住んでいる。一人になった時には読書によって世界を広げることもできるのだ。そしてグループでも良いし、また一人でも良いのだが、旅に出よう。知らない土地では多くの新しい経験ができるし、新たな友人もできるであろう。今までつき合っていた友人と一緒に旅をすることによって、その友人の新たな側面を見出すこともあり得る。

【 】

その旅は、国内旅行も良いであろうが、できれば一度は外国旅行することを薦めたい(諸事情で外国へ行けない人は、外国について書かれた本や映画を見てほしい)。これの意味は、自己を一層客観的に見つめること、日本を外部から見つめる

ことに存する。また自分のアイデンティティを確立するのに役立つであろう。また日本の長所と短所を理解するのに役立つ、一層日本への愛が深まるであろう。

愛知大学は、イギリス、アメリカ、中国、ドイツ、フランス、韓国、オーストラリアと海外短期語学セミナーの取り決めをしているので、夏休み或いは春休みに、大学からの手配で安全に外国へ出かけて勉強をして単位を取ることができる。これは大変有り難い制度である。確かに費用がかかるが、このためにアルバイトをすることは大いに薦められることである。

筆者も何度か外国へ旅行して来た。一人の時もあれば団体の時もあった。若いときは体力があるので、少々無茶をしても心身には余裕がある。冒険をしてみる事が大切である。筆者が、イギリスの湖水地方へ一人旅をしたのは約25年前であった。初めて接するどの人もたいていは親切であった。修士論文はワーズワスについて書いたので、彼の詩に詠われていて有名な水仙を見たくて、アルズウオーター湖方面まで一人で行ったのだが、どの辺りに水仙があるのかは分からなかった（誰にもその場所は分からないらしい）。一人で何キロも歩き回って夕方になり、暗くなったので心細くなりながらもバス停まで約2時間、農地の間の細い道を歩いたものだった。辺りには誰一人としていなかった。全くのひとりぼっちであった。しかしバス停まで到着してみるとすでに最終バスは出てしまっており、ヤムなく近くのウィンダミア湖畔のホテルに泊まったのだった。このような思い出は今では貴重なものになっている。逞しさを身につけることができたのだから。

初めてイギリスへ行ったのはそれよりも約十年前のことであった。これは団体旅行で出かけたのだが、イギリスへ到着したときの感激は忘れられない。まだ海外旅行が珍しいときであったから。初めてイギリスへ行って帰国したとき、是非またイギリスへ行きたい、と思った。そしてこの思いは実現したのであった。

『『未知』への旅』ということで人間や場所と

の新たな出会いについて少しばかり述べて来た。海外旅行について述べたが、遠い所へ出掛けなくても日本の身近かなところでも新たな出会いはいくらでもある。行きたくても諸事情によって外国へ行けない人もいるであろう。しかしがっかりする必要はない。つまりは、勇気を出して今まで知らなかった人々と、また読んだことがなかった本と、出かけたことがなかった所と接することが大切なのである。

イギリスで1年間暮らして 思ったこと

法学部
多田 哲也

昨年度2004年4月から2005年3月まで、海外研修でイギリスのオックスフォード大学で研究する機会を与えられた。実際にイギリスという国に一年間住むことで、色々気づいたこと、考えさせられたことを、この場を借りて記してみたいと思う。

まず最近のイギリス人の子供に対するしつけや態度について思ったこと。私の今回のイギリス滞在の場合、8歳から1歳までの小さい子供たちをともなっていたせいで、小学校その他の場所で、同じぐらいの年齢のイギリス人の親子と接する機会が多かった。それで彼らの子育てぶりについて観察する機会も多かったわけだが、正直な感想として、最近のイギリス人の若い親たちは、しつけなどについてかなり甘くなってきているんじゃないかな、と感じることが多く、私個人としては、